

小学校の修学旅行における教師主導から 児童主体へのパラダイムシフト

佛教大学研究員 齋 藤 浩

抄 録

小学校の修学旅行というと、ただ楽しく行かれば良いというイメージがある。創設期であればそれでも良かったが、時代は「自ら考え判断する」ことを求めている。従って、修学旅行も実施の当日だけでなく、取り組み過程から児童の発想を取り入れ、児童主体で作り上げていかなければならない。

本稿では、児童主体とした場合、どこまでを

任せていけば良いのか、またどこまで任せることが可能であるのか、創設期の修学旅行の在り方から、最近の幾つかの小学校の実践までを通して、任せることの出きる範囲を探るものである。

キーワード：修学旅行、主体性、パラダイム、
レジャー、自由と責任

はじめに

クラスの仲間と修学旅行に行くというのは、今日では当たり前のこととして考えられている。2002年の修学旅行実施状況調査を見ても、小学校で94.5%、中学校で95.7%、高等学校で94.4%⁽¹⁾もの学校が修学旅行を行っている。

また以前は考えられなかった海外への修学旅行も飛躍的に増加している。日本修学旅行協会の調査によると、「海外修学旅行を実施する高校の総数が1000校を越えたのが平成12年度(2000)、20世紀最後の年であった。高校全体の約20%に相当する学校が、修学旅行の目的地を外国に定めたということである」⁽²⁾とあるように、高等学校では海外への修学旅行が決して珍しくない時代へと突入している。

大きな様変わりを見せはじめた修学旅行であるが、その起源は明治19(1886)年、東京師範学校(現在の筑波大学)が実施した千葉県の鋤

子方面への長途遠足だと言われている。同校の記録に、「明治19年2月、始めて行軍旅行を実施す。(中略)兵式による行軍に於ても、學術研究を目的とする旅行を兼ねしむるを以て適当と認め、適宜日数を定め、諸学科の教員、之を引率することとし、此の日始めて千葉県銚子港方面に之を試みた。今日広く行はるる修学旅行の嚆矢である。」⁽³⁾とあるように、兵式操練と學術研究を兼ねた旅行であったようである。富国強兵政策下において、時代のニーズが兵式による行軍を生んだということは容易に想像がつく。

それでは現代という時代が求める修学旅行像とは、一体どのようなものであろうか。現代社会では、余暇に家族で出かけたり旅行に行ったりするのは一般的である。従って、旅行そのものの珍しさを修学旅行に求めることは難しい。国際感覚を身に付けるという理由で海外への修

学旅行が実施されているようだが、今以上に渡航が頻繁な時代に突入するとしたら、同様に価値を失う懸念がある。

そのように考えると、修学旅行において、「旅行をする」という行為以上の価値を見つけることが不可欠となるはずである。本稿では、海外という選択肢のない小学校の修学旅行に着目することで、新しい修学旅行のパラダイムを提起したいと考えている。小学校では、家族で訪れたことのある場所に再び学年という単位で出かける場合も想定され、その中で価値を見いだすということは、中学校や高等学校での実践に対しても大きなヒントになると考えたからである。

1. 創設期の修学旅行の意味

小学校の修学旅行の起源は、明治20年代や30年代に見て取れる。日清戦争が明治27年～28年に、日露戦争が明治37年～38年にあったことを考えると、まさに時は軍国主義の時代である。

明治24年の長野県上伊那高等小学校伊那富分校の記録によると、「2日間に諏訪地方を一周せんことを予定す、……在籍生徒の過半即ち3年2年1年合わせて82人を3隊に分ち各隊1人の行進長を置き其隊の行進を司らしめ各隊亦1人の職員置きて其隊の監督に任す、別に隊長1人あり3隊の命令を司る、……午前11時諏訪郡川岸村に達し暫時休憩して昼飯を喫せしめ更に隊伍を組み検閲を行ふて発す、進むこと10数町平野村に達す、……進むこと数町にして大鏡の富岳を倒写するものあり衆生凝視一層の快を増せり、是れ即ち琵琶湖なり……午後6時牡丹屋に投宿し本日の行程凡そ5里余……高島公園に至り……園内に噴出する瓦斯を見る、蓋し該瓦斯は熱度強く去りとて煙煤も少なからざるを以て薪及び燈に代用せる者なり、午前10時又旅館に還り直に帰途に向ふ」⁽⁴⁾とある。ここで注目すべきは、兵式体操の組織や隊

伍を取りながらも、現代の学校教育でも見られるような社会科学や理科観察の要素がふんだんに盛り込まれている点である。

また明治35年の東京都福生市第一小学校の修学旅行の記録を見ると、東京の西郊から徒歩で南下して、神奈川県を縦断し、江ノ島・鎌倉・横須賀等を見物し、帰路は鉄道を利用しての4泊5日で出かけたことが分かる。「4月3日（晴）……拝島の渡船を渡り八沢峠を越え……神奈川県の相原に出て……原町田を過ぎ……鶴間という一寸した宿場につきました。4月4日（晴）……船頭さんが吾等の一行を呼び止めて江の島行きをすすめるので、先生が賃銭などをかけ合い一行のその舟に乗り込み……先生は立派な旅館へは目もくれず海岸ぞいの棧橋ぎわの江戸屋という小さな旅館にはいられました。4月5日（晴）……鎌倉で先ず大仏様を見物して長谷寺へ参詣しました。……その晩一行は雑談の折、二、三の者から宿屋の選定をもう少し良い所にしてほしいという説が出ました。4月6日（晴）……先生が吾等に今日の宿舎の事は君等に任すからよろしくやってくれといわれ、高崎君と私に命令されました。止む得ず2人は野嶋館の玄関を訪れました。……先生に復命いたし当日は野嶋館に投宿いたしました。4月7日（晴）……横須賀軍港を出発し同停車場より汽車に乗り大船横浜を経て、品川に着き駅頭の一旅館に投宿しました。4月8日（雨）……鉄道馬車に乗り浅草に向い二、三見物して一写真館に入り一行の記念撮影をいたし飯田町駅から甲武鉄道に乗り込み……」⁽⁵⁾とあるように、こちらは軍国主義下にあることを感じさせない、のどかな修学旅行であったことが伝わってくる。一日の移動距離の長さから行軍的な要素が見られるとしても、旅館に宿泊する交渉を教師が児童に任せるなど、旅行を楽しむ様子が見て取れるようである。

ところで、例示した2校が修学旅行を実施し

た明治時代中期とはどのような社会であったのだろうか。日本教育史の資料を読むと、次のように載っている。「今日の遠足にあたる運動会や宿泊をふくむ長距離行軍の修学旅行も整然と隊列を組み、軍歌を歌いながらの行進であった。子どもたちの遊びにも日本とロシアの旗を押したてて奪いあったり戦争を真似た遊びが流行ったり、唱歌も『勇敢なる水兵』『軍神広瀬中佐』『水師營の会見』などが歌われた。また兵營や軍艦の見学、あるいは兵士の歓送迎・戦勝祝賀の提燈行列などをとおして軍国主義を育み、『末は大臣か大将か』と夢見た。制服や制帽がとりいれられ始めたのもこの頃であった。』⁽⁶⁾

では、この2校の実践から分かることは何だろうか。それは、修学旅行に行くという行為自体に意味があったということである。移動した際は整然と隊列を組んでの行進であったかも知れないが、社会科見学的な要素があったり、自分たちで旅館を決めたりするなど、レクリエーションとしての意味が多分にあったはずである。時代は戦時下、自由に国内を行き来するのが難しいことは容易に想像できる。児童が集団で他の土地に移動するには、行軍演習という名目のたつ修学旅行という形が適当であったのではないかと考えられる。

また、両校の修学旅行の記録を見ると、事前学習をしたという記述が見あたらない。福生市第一小学校の実践について限って見ると、旅行そのものが行き当たりばったりという感じさえてくる。日常的な学校生活に比べて、この修学旅行は非日常的な位置づけがあったのではないか。それほど豊かではなく国家の統制が強かったからこそ、この時代の修学旅行には意味があったと考えられる。

2. 楽しさを重視する昭和中期までの意識

創設期の修学旅行について触れてきたが、多

くの場合、旅行の楽しさを前面に出すような実践がその後増えてきている。戦後の修学旅行の様子を見ても、「旅館は米持参でなければ宿泊できず、この米持参という修学旅行は戦後長く続き、昭和30年代前半頃には、米持参に変わって、修学旅行諸経費の中に『米代』という項目の存在したことも、多くの教職員達に語り継がれているところである。』⁽⁷⁾というように、自分たちで米を持参してでも修学旅行に出かけたいということが伝わってくる。太平洋戦争という厳しい統制下での生活が解除され、貧しい環境の中でも、児童は意気揚々と出かけていったことが見て取れるようである。

戦後の修学旅行に対する考え方は、昭和26年の学習指導要領一般編からも類推できる。「学校における教育課程の構成」を見ると、「児童・生徒の生活は、いろいろな条件に左右されて発展しているといえる。したがってどのような機会に、どのような有効な生活経験が、発展していくかということを予想して計画することは、よい計画をたてるに当って、欠くことのできない事がらである。そのためには、たとえば、前にも述べたように、季節の変化に適応した計画であるとともに、いろいろな行事を考慮し、これを適切に取り入れていくことが必要となろう。行事には、学校・地域社会・国家・国際社会を単位とした行事もあるし、またいろいろな公共の団体の行う行事、たとえば、さまざまな奉仕活動や、教養や健康を高め生活の安全をはかる行事などがある。』⁽⁸⁾とあるように、いろいろな行事を考慮したり、学校行事の存在を明記したりするにとどまり、内容に関する制限がないことが分かる。つまり、修学旅行は通常の教育課程とは別のものととらえられていた可能性が高い。時は戦後数年しか経過していない頃、また昭和26年というのは、修学旅行を含む国鉄の小口団体集約列車の運転が開始された年でもある。児童が通常の学校での授業を離れ、意気揚々

と旅行に出かける様が見て取れるようである。明治期の創設期の修学旅行と同様、楽しさということが大きな目的であったことは容易に想像できる。

戦後の何もないつらい時期の中で、修学旅行など校外での活動に楽しさを求めようという意識は昭和30年代まで引き続き存在している。その記述内容からは、日々の生活の中でぎりぎりの生き方をしている児童に対して、慰安的な位置づけとして修学旅行を実施している様子が見られる。

昭和33年の小学校学習指導要領、「第3章道徳、特別教育活動および学校行事等 第3節学校行事等 第3指導計画の作成および指導上の留意点」においても、「学校行事等の計画や実施にあたっては、学校生活に変化を与え、児童の生活を楽しく豊かなものにするとともに、集団行動における児童の規律的な態度を育てることなどにじゅうぶん配慮する必要がある。」⁽⁹⁾とあるように、依然として楽しさというものがキーワードとなっている。

楽しさを希求するといった考え方は、はじめて学校行事という分野を取り出して書かれた、昭和35年の小学校学校行事等指導書においても明らかである。「第3章学校行事等の運営と指導上の留意点 第4節遠足 1 遠足のねらい」について次のように記述している。「学校における教育活動は、一般にその教育の場が学校内に限定されているのであるが、遠足は学校外に教育の場を求めて行われる教育活動であり、見学、修学旅行なども同様である。遠足のねらいは、一つ一つの遠足についていっそう具体的に考慮されなければならないのであるが、一般的なねらいとして、次のように考えることができるであろう。校外の自然や文化に触れさせることによって、児童に豊かな経験を与え、学校における学習活動を充実・発展させるとともに、集団行動の楽しさを感じさせる。なお遠足は、

校外における集団行動の指導のよい機会であるといえよう。」⁽¹⁰⁾

3. 昭和中期以降の児童の主体性の重視

最初に児童の主体性に関する表現が出てきたのは、昭和44年の小学校指導書特別活動編である。「第3章学校行事 第3節学校行事の運営と指導上の留意事項」の「遠足の行実施上の留意点」において、「計画の作成に当たっては、児童の自主的な活動の場をもじゅうぶんに考慮し、児童の意見もできるだけ取り入れるようにすることが望ましい」⁽¹¹⁾と、修学旅行の計画をする上で、はじめて児童の考えを取り入れることをねらいにしたのである。

昭和53年の小学校指導書特別活動編、「第3章学校行事 第3節学校行事の運営と指導上の留意事項」の「4 遠足・旅行的行事（2）実施上の留意点」においても、「計画の作成に当たっては、児童の自主的な活動の場をもじゅうぶんに考慮し、児童の意見もできるだけ取り入れるようにすることが望ましい」⁽¹²⁾と、昭和44年に出した児童の主体性の方向をそのまま踏襲している。そして同様の表現は、平成元年の小学校指導書特別活動編まで続けてされているのである。

児童の主体性を重視する姿勢は、平成5年の小学校特別活動指導資料「新しい学力観に立つ特別活動の創造」において、さらに顕著になってくる。「第2章新しい学力観に立つ特別活動の構想と展開 第1節新しい学力観に立つ特別活動の構想 1 特別活動改善の視点」において、児童が課題意識をもって取り組めるように、「これからの指導においては、学校行事についても一人一人の子供の参加に当たっての課題意識を高め、主体的な活動を展開する必要がある。そのためには、学校行事の指導計画の作成と指導に当たって、実施する行事について個々の子供の課題意識を高め、期待感を高め、活動の過程

を重視することが大切であり、『自分は何のために宿泊的活動に参加するのか』……など、課題意識をもって取り組むことが大切である。』⁽¹³⁾としている。さらに、「2新しい特別活動の指導の工夫」においては、「学芸的行事や遠足・宿泊的行事などは、他の行事に比べて、その中に子供の願いや考えを生かすことができる行事である。したがって、そのような行事の指導計画作成に当たっては、子供の願いを積極的に取り入れたり、行事の一部を子供たちの考えで運営することも考慮したりするなど、子供が主体的に活動する場と機会を与えることが大切である。』⁽¹⁴⁾と、指導計画の作成において児童の参加を奨励している。そうした姿勢が現行の指導要領の礎となっているのである。

こうして、現行の小学校学習指導要領解説特別活動編（平成11年）「第3章各内容の特質とその指導第4節学校行事 2学校行事の活動内容と指導計画 ④遠足・宿泊的行事」における児童の主体性に関する表現は、より児童の参加を奨励するものへと変化していったのである。

実施上の留意点について、「計画の作成に当たっては、児童の自主的な活動の場を十分に考慮し、児童の意見をできるだけ取り入れた活動ができるようにする」⁽¹⁵⁾とあるように、児童の計画段階からの参画が必修的な学習内容となった画期的な記述である。

昭和44年の小学校指導書特別活動編で、はじめて児童の主体性を重視する方向性が打ち出された訳であるが、現行の指導要領との違いは両者を比較することでより顕著になる。計画の作成に当たって、次の2点が大きく変化したのである（表1）。

まず、表1の①を見て分かるように、計画の作成に当たって児童の自主的な場の考慮をする際、昭和44年は「場をも」であったのに平成11年は「場を」としている。児童が自主的に活動できるようにするためには、第一に活動する場

（表1）児童の主体性に関する表現の比較

昭和44年	平成11年
①児童の自主的な活動の場を <u>も</u> じゅうぶんに考慮	①児童の自主的な活動の場を十分に考慮
②児童の意見もできるだけ取り入れるようにすることが <u>望ましい</u>	②児童の意見をできるだけ取り入れた活動が <u>できる</u> ようにする

が不可欠であるという条件設定を提示したものである。また「場を」と限定することで、活動の場がないと児童の主体性は育まれないということが伝わる表現となっている。

また表1の②から、大きく2箇所変化していることも分かる。

1つ目は、どの程度児童の意見を取り入れるかという視点である。昭和44年は、「児童の意見も」できるだけ取り入れるとしているのに対し、平成11年には「児童の意見を」できるだけ取り入れるとしている。昭和44年の記述から分かることは、計画の作成についてはあくまでも教師が中心だという前提であり、児童の意見は付加的な意味でしかないということである。それが平成11年になり、児童の意見を取り入れることが前提となった。児童が計画段階から主体的に参画できることが保障された証である。

2つ目は、児童の意見を取り入れることに対する考え方である。昭和44年は児童の意見を取り入れることが「望ましい」としてあるのに対し、平成11年には「できるだけ取り入れた活動ができるようにする」としている。極論するならば、昭和44年の段階では、児童の意見が取り入れられることが望ましくても、結果として反映されなくて良かった訳である。それが平成11年になって一変した。児童の意見を取り入れた活動をすることは絶対条件であり、取り入れる程度についても、できるだけとしているのである。ここから読みとれることとして、児童の意見が取り入れられる割合が多ければ多いほど良

いということが言える。

このように、昭和44年にはじめて児童の主体的な参加が唱えられ、様々な変遷をしながら現行の指導要領での押さえとなってきた訳である。創設期の修学旅行のねらいが、楽しむことを中心にしていたのに比べると、現在の修学旅行のねらいは如何に児童が主体的に参画するかが問われているのである。

社会の変化とともに教育の在り方が変わる必要があることを考えると、それももっともなことであろう。明治時代に比べると、現代社会は例えば町に出かけることや旅行に行くことが当たり前前の時代だからである。

子どもの体験活動研究会（平成15年報告）においても、児童の外での活動が多岐に渡っていることを示している。例えば、「キャンプやハイキングに出かけるか」という調査に対して、「よく行く」小学校3年生児童が3.4%、小学校5年生児童が3.1%である。「時々行く」小学校3年生児童は15.3%、小学校5年生児童が12.2%となっている。また「映画や買い物など町中に出かけるか」という調査に対しては、「よく行く」小学校3年生児童が23.7%、小学校5年生児童が20.4%である。「時々行く」小学校3年生児童も42.2%、小学校5年生児童が41.7%⁽¹⁶⁾と高い数字を示している。

つまり、現代社会に生きる児童たちは、わざわざ修学旅行に行かなくても、所謂楽しいことがたくさん存在するのである。そのような状況下では、敢えて楽しさを前面に出すような修学旅行は必要ない。娯楽にあふれた現代社会だからこそ、取り組む過程で如何に児童の意見を取り入れるかを重視した修学旅行に発想転換したのである。もしも苦勞してでも自分の考えが修学旅行の計画に反映されたならば、児童の多くが大きな成就感を得ることであろう。家族など小集団の旅行やキャンプ、または町に出かけるのに、綿密な計画を立てるケースは少ないはず

である。だからこそ、児童の意見をできるだけ取り入れた修学旅行の実現が必要なのである。

では、実際に修学旅行の計画を立てる際に、教師はどこまで児童の意見や考えを反映させているのだろうか。次に、子どもの自主性を生かしたとされる修学旅行の報告を見ていくことで、ねらいと実践との整合性を考えよう。

4. 児童の主体性を目指した修学旅行

(1) 湯河原小学校の実践（昭和50年代）

先述したように、昭和53年の小学校指導書特別活動編で、遠足・旅行的行事について、「計画の作成に当たっては、児童の自主的な活動の場をじゅうぶんに考慮し、児童の意見もできるだけ取り入れるようにすることが望ましい」としている。昭和44年に児童の主体性を重視した方針を出してからある程度時間が経過しているので、児童の意見がどれほど生かされているかが問われる時期でもある。

神奈川県湯河原町立湯河原小学校の栃木県日光方面への実践は、そうした児童主体の修学旅行に対して、一つの方向性を示す価値を持つものであった。

まず、第1に、普通であれば何の疑問もなく教師が決めてしまうような、例えば車内の座席や部屋割りなどを児童に任せた点である。当時の実践について、『「今までは、車内の座席、部屋割りも先生が決めていたけど、今年は君たちに決めてもらいたい。大切な宿泊だ！君たちが納得するようにしてくれ。（後略）」と述べる、いつもと違う緊張感がただよっている。』⁽¹⁷⁾とあるが、最ももめそうな車内の座席と部屋割りを任せた点に、児童を主体とした修学旅行を展開しようという決意が感じられる。

第2に、大切なことは学年児童全員が参加する学年総会で決定していったことである。旅館でのテレビ視聴の可否、遊戯施設でのゲームの

可否をはじめ、おこづかいの額まで決定させていた点に注目できる。おこづかいの額については、学年総会において実行委員長が話した「ぼくたちの修学旅行は、みんなの手で進め、むこうでもみんなで交流を深めて楽しいものにしていこうと、めあてで確認したところです。おみやげも大事だけど、本当に大切にしなければいけないおみやげというのは、心に残る楽しさではないでしょうか。日光の美しい紅葉をもち帰れば、立派な美しいしおりができます。落ちている石を持って帰っても、大切なおみやげになります。お金をかければそれでよいおみやげになると考えるのは、まちがいでないでしょうか。」⁽¹⁸⁾という内容で、当初少ないとされた千円に決まったとされている。

このように、多くの部分を児童に任せた湯河原小学校の実践は画期的であったと言えるであろう。

しかし、例えば車内の座席や部屋割りなどを児童に任せたという発想自体に、児童に任せ切れていない現実が見られる。なぜなら、座席や部屋の決定は、修学旅行の取り組みの中心部分だとは言えないからである。

学年総会の議題にしても、同様である。おこづかいの額を決めることは大切なことだが、例えば日光に滞在している期間の行程を決めることは、もっと大切なことである。修学旅行の根幹にかかわる部分の決定をさらに児童に任せないと、児童の思考が高まることは期待できない。

昭和50年代の実践としては進歩的だと言えるであろうが、どこまで児童の主体性を重視するか考えさせられる取り組みでもあった。

(2) 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校の実践（平成期）

平成11年に小学校学習指導要領が大きく改訂され、「遠足・宿泊的行事」における実施上の留意点についても、「計画の作成に当たっては、

児童の自主的な活動の場を十分に考慮し、児童の意見をできるだけ取り入れた活動ができるようにする」となった。横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校の実践は、まさに今回の改訂と同時期の実践であり、児童がどれだけ主体的に関わっているのかを見ていく上で、とても興味深い報告となっている。

まずここで最初におさえなければならないのは、同校の6学年の八ヶ岳への宿泊学習（山梨県及び長野県）を修学旅行と呼んでいないことである。ただし、同学年において他に宿泊学習を実施していないことから、修学旅行としての意味や価値があると考え、本稿において扱っていくこととする。

児童の意見をできるだけ反映させるために、同校で考えたことは、与えられた計画に従って活動するのではなく、計画作りから児童が行っていくことであった。具体的な方法として、実践報告の中で、「6年では、『目的地までの行き方』（時には帰り方も）それぞれのグループで計画します。コースや利用する交通機関、その距離や時間、費用などをグループで調べ、決定していくのです。ですから、当然計画作りのための事前の準備（調査、話し合いも含め）に十分時間をかけ、教師もいっしょに考えたり助言を与えたりします。同時に、訪れる地域、活動の拠点となる地域の自然、文化、社会、そこで生活を営んでいる人々のようすなどについての調査・研究も十分に行い、それらをもとにして活動の計画作りを進めていきます。だからこそ、自分たちの作った計画に『自信』と『こだわり』を持つことになります。」⁽¹⁹⁾と、児童中心の学習を展開している。

また同校の実践の中で着目すべき点は、4日間の行程の中心単位となるグループの決め方を児童に任せている点である。実際の決め方については、次のように報告している。「八ヶ岳の生活の4日間は、グループの活動が主体になり

ます。ですからグループづくりへの関心は高く、今年は特に、1グループの人数よりも、その作り方について、学年集会で様々な主張が提案されました。学級の枠を越えて（はずして）仲良しの仲間と、またはくじ、行きたい場所別、など。最初の話し合いでは自分たちの主張をとおすために、他への避難をする形での話し合いに終始しました。やがて話し合いを重ねていくうちに自分の思いだけを主張している意見の方が次第に非難されるようになり、話し合いの方向が整理されてきました。（中略）このような話し合いの結果、基本は『学級内の行き先希望別グループ』とし、大きな希望枠をとってグループづくりを進め、12のグループが生まれました。』⁽²⁰⁾

このように、児童の意見をできるだけ取り入れた同校の実践は、現行の指導要領のねらいに対応した、パラダイムを転換するような進歩的なものと言わざるを得ない。

しかし、児童に任せるとしながらも、教師が主導しているという課題は残ってしまう。例えば目的地までの行き帰りを児童に計画させるとあるが、計画作りを提案したのは教師であり、児童から「自分たちで計画したい」と出てきたものではない。行き帰りの方法を考えるという作業は膨大な時間がかかるであろう。行き帰りは全体行動でも良いから、「現地の人々との交流活動の計画にもっと時間を割きたい」と希望する児童がいたとしても、その子のニーズに対応する弾力性が見られないのである。

グループ作りについても、同様なことが言える。4日間の活動の大部分がグループであると、最初から決まっているのである。またグループの決め方についても、「仲良しの仲間と、またはくじ」という内容が出るなど、宿泊学習に行く以前に学級指導で済ませておくべき内容まで出てきている。グループの単位を決めるような部分に主体性を持たせるのではなく、活動

単位を子どもに考えさせるところ始めても良かったのではないかとと思われる。

児童の主体性を大切にするとしながらも、実は「どこを児童に任せるか」という発想に、教師の都合が多分に含まれているところが残念であった。ゼロから児童に任せることができるとしたら、多くの子が全体像を意識しながらの取り組みになるという印象を持った。

5. 主体性の重視に対する全国的な意識

2校の実践をもとに児童の主体性をいかに育んでいけば良いか述べてきたが、全国規模での修学旅行に対する意識は、いったいどの程度であろうか。

最初に、全国の小学校の見学先上位を見ると、修学旅行の傾向をさぐっていこう。平成18年に日本修学旅行協会が実施した調査（全国の国立・私立小学校及び東京都・政令指定都市の公立小学校の計389校を対象）では、全国見学先ベスト30を出している。その中でやや気になるのは、レジャー施設が見学先として多いことである。1位の「志摩スペイン村」(三重)が65校と圧倒的に多く、3位「鳥羽水族館」(三重)、8位「スペースワールド」(福岡)、12位「USJ」(大阪)、14位「ミキモト真珠島」(三重)、16位「ハウステンボス」(佐賀)⁽²¹⁾と、ベスト20の中に6つも入っている。

レジャー施設が一概に悪いとは言いがたいが、それでもこうした結果を見ると、レジャー的な楽しさを重視する傾向が見て取れるようである。創設期の修学旅行では、まだ旅行自体が珍しい時代であったから楽しさの希求でも良いが、この結果だけを見ると、児童の主体性という発想が希薄なのではないかという懸念を持ってしまう。

次に、小学校の教員を対象に全国小学校学校行事研究会が実施した修学旅行の必要性を問う

アンケート結果を見てみよう。修学旅行を、「今後も残したい」と回答したのが73%、精選しても致し方ないと回答したのが16%であった。精選しても構わないという項目に対して、遠足が4%、野外活動が14%⁽²²⁾であったのに比べると、この16%という数字はかなり高いと言わざるを得ない。児童の主体性を育むために、なくてはならない行事であるという認識が、さほど高くないということが分かる。小学校の卒業期にあり、児童の意見が多く反映される可能性のある行事だけに残念な結果である。

さらに、日本修学旅行協会の調査を見ると、修学旅行の当日以外の取り組みから、児童の意見がどれだけ取り上げられているかを類推することができる。(表2)⁽²³⁾

〈修学旅行の事前学習方法〉

授業	38.1%
インターネットでの調べ学習	31.8%
集会での発表	29.7%
その他	0.4%

〈修学旅行の事後学習方法〉

授業	52.2%
文集・新聞づくり	39.2%
文化祭での発表	2.7%
その他	5.8%

授業の形態がどのようになっているのかは分からないが、もし児童の主体性を重視しているのならば、学年総会や現地との交流活動などが項目としてあるはずである。

このように考えると、先述した2校の例は希有なことで、ほとんどの場合、「例年通り」という考え方で進められている可能性が高い。現行の指導要領がねらっている「児童の自主的な活動の場を考慮し、児童の意見をできるだけ取り入れた活動」を実践しているケースは稀という悲しい現実が見えるようである。

6. 児童の主体性を重視した大沼小学校の挑戦

神奈川県相模原市立大沼小学校では、平成18年の栃木県日光方面での修学旅行において、大胆な挑戦をしている。筆者が6年生の担任であったときに実践したものであるが、宿泊する2泊3日の日にち、旅館、往復の交通手段がバスという3つの条件以外、全ての項目の決定及び学習方法を児童に任せたのである。

児童に多くの部分を任せるに当たっては、次のようなねらいがあった。1つ目は、「近年の子どもの様子は権利ばかり主張して、自分さえ良ければという傾向がある。今回子どもたちに多くの部分の決定を任せることにより、自由には責任が付いて回ることが体感できる可能性が高く、責任を全うしたときの成就感についても併せて自分の財産とする期待が持てる」ことであり、2つ目は「今回の修学旅行をただの一活動ととらえるのではなく、年間を通じた自立と共生のための機会と考えている。ここでの取り組みが子どもたちの主体性を育み（後略）」⁽²⁴⁾というものであった。学年職員でも共通理解を持つための会議を重ね、児童の主体性を重視した取り組みに踏み切った訳である。

決め方は一部の児童が決定するのではなく、各学級で話し合ったことを各学級のリーダー役の修学旅行実行委員が持ち寄り、会議で検討するという方法を取った。また実行委員会では解決できそうにない内容については、学年全員を集めた学年会議で話し合い、その場で決定するようにした。そこにいる全員で決めたという形にしたかったからである。

最初に行ったのは、3日間の行程の概略を決めることである。もちろん日光についての知識を十分に事前学習した上で話し合いとなった。児童から出た意見の大半は、「学年・学級・班での活動をバランスよく入れたい」というものであった。

(1) 3日間の行程決め

1日目は、まだ到着して現地の様子になれていないという意見から、学年単位での活動と決まり、東照宮と華嚴の滝の見学と決まった。また昼食場所も両見学地に近い店ということで、児童から教師に予約を取るように依頼があった。我々教師も児童のニーズを考え、昼食メニューは同料金での選択制とした。

2日目は、一番活動の時間がとれるという理由から、学級別での活動となった。学校から乗ってきたバスがあるので、地図を見ながら各学級ごとにコースを決めていった。しかしそのコースが確かなものかどうか心配は残る。そこで旅行者に来てもらい、各クラスごとに面接をし、コースの妥当性について吟味してもらった。場合によっては修正も出たが、その後の学級での話し合いは活発になっていった。また昼食についても各クラスごとなので、旅行雑誌等をみながら直接現地の店と確認をした。実行委員会で2日目にかけて良い金額は、見学費や体験活動費を含めて2,000円以内という条件が出ていたので、中には学級会で携帯電話を利用しながら昼食料金の交渉をする学級もあった。また、教師からここを見学しなさいという指示を出さず、見学先や体験学習先を全て自分たちで決定したので、調べ学習についても主体的に取り組んだことは特筆すべき点である。

3日目は、班ごとに奥日光の戦場ヶ原をハイキングすることとなった。また自然について詳しいことを知りたいと希望する児童が多く、現地のガイドを付けた。ただ昼食場所については苦労した。何しろ120名の大人数である。困った昼食係が折衝に成功したのは、ホテルの宴会場(披露宴会場ともなる)であった。

また3日間の時程についても児童が決定した。教師は「常識的な時間設定を」と言っただけであったが、予想以上に妥当な時間設定がされ、問題とされる部分は全くなかった。

(2) 旅館での生活

旅館では朝食と夕食が2回ずつあり、また入浴も2回ある。起床してから朝食までの時間や一日の活動が終わって就寝するまでの時間もある。その全てを児童が話し合い、そして決定していった。

通常であると、食事指導はつつい教師が大きな声を出しがちな場面である。だが、児童に全てを任せてみると、いただきますの挨拶・片付け・ごちそうさまのタイミングの取り方など、全て主体的に適切に行ってくれた。我々教師はただ自分の席に着き、食事を済ませるだけであった。

入浴時間についても児童が自分たちで設定するだけでなく、学級ごとのローテーションまでの確に計画した。また入浴当番については、係の児童が教師以上に厳しくチェックし、筆者が1回様子を見に行くと、「大丈夫ですから、ここは任せてください。」という言葉が返ってきた。全員の入浴後、風呂場を確認に行ったが、全く問題は見あたらなかった。

小学校の修学旅行というと、起床してから朝食までの間に「朝の会」があるのが一般的であろう。そこにも児童の工夫があった。2日目の朝は、歩いて10分ほどの湖まで散歩という計画であった。また3日目の朝は、旅館の前にある足湯を借り、お湯の中に足をつけながら朝の会を行うといった粋なものであった。

夜の活動についても、児童の意志が明確に表れていた。1日目の夜については、せっかく多くの自然の中に来たのだから、学年全員で夜の散歩を楽しみたいということになった。児童から先導役を任された筆者のあとに続き、120名が夜のハイキングコースを歩いた。2日目の夜については、学級ごとの自由時間となった。1時間をどう過ごすか、児童が主体的に考える場がまた増える形となった。

(3) 持ち物や約束

児童が持ち物として関心が高いのが、お菓子の有無とお菓子にかけて良い金額、またお小遣いとして持って行って良い金額がいかほどかである。金銭的なことを児童に任せることは心配だという同僚の意見もあったが、「全て任せる」と言った以上、児童の意志に委ねる決意をした。結果的にはお菓子は500円以内、お小遣いについては前年度の5,000円を下回る3,000円で決着した。5,000円のお小遣いを希望する児童も多かったが、ある児童の言った「自分たちは買い物をしに行くのではなく、修学旅行に行くんだ。家族へのお土産が必要だという意見もあるけど、日光の様子を話せば済むことだと思う。だから親のお金を使って5,000円も持っていく必要がない。」という言葉で多くの児童が納得した。

またお菓子を食べて良い時間や場所についても全て児童が決定した。学習にあまり関係ない時間が良いという判断で、バスでの移動時間に食べることとなった。またお菓子を食べ始めて良い時間や終わりの時間も、係の児童が指示した。食べ終わったときにお菓子のかすが落ちていくということもなかった。

旅館内の約束事についても、あまり細かい部分まで作らず、基本的には学校生活に準じるという方向になった。またその他の場面については常識的に判断しようということになった。特に大きな違反もなく、穏やかな3日間の生活となった。

このようにして、日にち・バスでの往復・旅館以外の決定は全て児童に任せるという形式の修学旅行は無事に3日間の日程を終えた。児童の主体性を重視した成果は、その後の学校生活でも顕著であった。

児童が何かある度に、「自由と責任」という言葉をスタンダードにして判断する場面が増えたのである。ある児童が言っていた。「最初は

自由だから何をしても良いと思っていたけど、自由には責任が付いて回ることが分かった。」児童の学ぶ責任は大きく2つある。1つは、自分たちで確かな物事を決める責任である。もう1つは、自分たちで決めたことを自分たちで守り通す責任である。この2つを学ぶことができたのは、多分に児童一人ひとりがこの修学旅行に主体的に関わったからだと思われる。「児童の自主的な活動の場を考慮し、児童の意見をできるだけ取り入れた活動ができるようにする」ことで、大きな成果を上げたことは確かである。

おわりに

旅行に行くということ自体が希有な時代であった明治期。行軍旅行としての意味と併せて、修学旅行には「楽しさ」という大きな意味があった。

そうした時代背景に比べると、現代はレジャー全盛時代である。家族旅行や例えば日帰りでディズニーランドに行くことは、当たり前である。また児童を取り巻く環境も大きく変貌を遂げている。多くの児童がゲームを携帯し、娯楽には事欠かないと言っても過言ではないであろう。

そんな時代だからこそ、当然、修学旅行の意味や価値も大きく変化が求められてきたのではないかと推測される。旅行そのものの楽しさだけでは、学習として成立しないのである。「修学旅行に行く」ということの価値より、「いかに修学旅行を作っていくのか」が重視されてきたのだ。それが現行の指導要領に、計画段階から児童が参加していくという形で表れているのだと考えられる。

児童の主体的な関わりについては、湯河原小学校と横浜国立大学教育人間科学部附属小学校の実践の是非を論じ、更に筆者の勤務する大沼小学校の取り組みを通して、どこまで児童に任

せられる部分が考えられるか論述してきた。しかし、まだここで満足した訳ではない。児童の持つ可能性には計り知れないものがあるからである。教師側の都合で可否を決めてしまうことは、児童の主体性を損なうことになりかねない。学校として何ができるかと考えるのではなく、児童に任せる部分があるとしたら、どこまで考えられるのかという視点で吟味する必要がある。そうした児童主体の発想を持ってこそ、新しいパラダイムが実現するからである。

そうして考えるとしたら、実施する日の決定だけは教育課程の編成上、教師が決めるとしても、学級ごとに行き先を決定し、宿泊先をいくつかの候補の中から選択し、移動方法までも児童が決めることは不可能なことではない。なぜなら、その先の決定の全ては児童に任せられることを筆者は実践しているからである。前年と同様の場所に行き宿泊するという修学旅行の形から、方面から自由に児童に決定させるという、まさに大きなパラダイムシフトである。

もしもそのような形が実現するとしたら、児童はより現地のことを学び、より現地に愛着を持ち、創造性豊かな取り組みを発揮するであろう。また事前の学習で、旅館のオーナーと細部の確認をしたり、旅行業者をより活用したりする場面も増えるはずである。主体性が周りの人との関わりをより深めていくことにもなるのである。

いつの日か、児童が全て企画・運営をし、従来の「教師が児童を連れて行く」という意識から、「児童が教師を連れて行く」という、そんな形での修学旅行が実現することを切望している。

【引用文献・引用資料】

- (1) 日本修学旅行協会『日本修学旅行協会五十年史』2002年、195頁
- (2) 同書、169頁

- (3) 鈴木健一『修学旅行の理論と実際』ぎょうせい 1983年、86頁
- (4) 同書、106頁
- (5) 同書、107頁
- (6) 石川松太郎・大戸安弘・寿福隆人・関山邦宏・多田健次・四方一弥『日本教育史』玉川大学出版部 1987年、111頁
- (7) 鈴木健一、前掲書、152頁
- (8) 文部省『学習指導要領一般編』明治図書、1951年 91頁
- (9) 文部省『小学校学習指導要領』大蔵省印刷局 1958年、58頁
- (10) 文部省『学校行事等指導書』日本書籍株式会社 1960年、29頁
- (11) 文部省『小学校指導書 特別活動編』東洋館出版社 1969年、99頁
- (12) 文部省『小学校指導書 特別活動編』東洋館出版社 1978年、101頁
- (13) 文部省『小学校特別活動指導資料 新しい学力観に立つ特別活動の指導の創造』全教図 1993年、12頁
- (14) 同書、20頁
- (15) 文部省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社、1999年、65頁
- (16) 子どもの体験活動研究会『完全学校週5日制の下での地域の教育力の充実に向けた実態・意識調査』2003年、54頁
- (17) 家本芳郎『遠足・修学旅行』あゆみ出版 1981年、47頁
- (18) 同書、65頁
- (19) 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校『心の育ちを願う総合学習』明治図書、1998年 140頁
- (20) 同書、151頁
- (21) 日本修学旅行協会『全国小学校修学旅行の調査報告』2007年、9頁
- (22) 全国小学校学校行事研究会『学校行事の創造的展開』東洋館出版社、1999年、113頁
- (23) 日本修学旅行協会、前掲書、12頁
- (24) 大沼小学校『修学旅行実施要項』、2006年

【参考文献】

- (1) 速水栄『うれしなつかし修学旅行』文藝春秋 1999年
- (2) 宮川八岐『遠足・修学旅行・自然教室のベストアイデア』、明治図書、2001年